愛知県がんセンター
丹羽 康正 総長に聞く

日本人のがんは、２人に１人がかかり、３人に１人が死亡するとされる。罹患して驚き、恐怖心を抱くのは当然だが、検査方法や治療が進化し、早期の発見、治療で治せる病気に。そんながん対策の国内屈指の中枢拠点が愛知県がんセンター（名古屋市千種区）で、病院での治療、すなわち臨床と研究所の両輪でがんと闘い、患者の生命を守り続けている。丹羽康正・県がんセンター総長に治療の可能性や新センター開設への思いを聞いた。９月は日本対がん協会が定めた「がん征圧月間」。

（聞き手は塚本隆編集長）

―がんセンターの現況で特筆すべき点は。

丹羽康正・県がんセンター総長　当病院は２０１９年にがんゲノム医療拠点病院に指定され、昨年更新されました。がんゲノム医療はがん遺伝子パネル検査を用いてがん組織などで多数の遺伝子を調べ、見つかった遺伝子変異を元に一人ひとりの体質や病状に合わせた治療を行うものです。がんは遺伝子に様々な異常が見られるので、効果のある薬品を特定できれば効果的な治療が可能になります。毎週検討会を実施して治療法を議論しますが、現状ではがん遺伝子変異が見つかっても治療に結び付くのは１割ほどにとどまっています。

―今後は個人ごとに異なる治療が中心になりますか。

丹羽総長　柱の一つになるでしょうね。現在適用されているのは標準治療が終了した手術不能や再発がんですが、薬が合えば、素晴らしい効果が期待できます。

―10 年ほど前に新たながん治療薬が注目されましたが。

丹羽総長　免疫チェックポイント阻害剤ですね。オプジーボ、キイトルーダなどで、免疫系のブレーキを解除し、がん細胞を攻撃する力を保つ薬です。標準治療に組み込まれてきたので、どこで使うのかという段階になっています。また、ＪＣＯＧ(日本臨床腫瘍研究グループ)やＷＪＯＧ（西日本がん研究機構）などに加わり治療の開発を進めていますが、例えば食道がんでは手術をする前に３種の抗がん剤を３回ほど投与すると、治療成績がぐんと上がるという研究成果が世界に発信されています。化学療法のバリエーションが増え、最も効果的な治療体制へと進化していますね。

―新たな取り組みですね。

丹羽総長　加えて、当センターではオンライン診療を活用した完全リモート治験を実施しています。患者さんとかかりつけ医とセンターの専門医師の３者がオンラインで診療方法を検討するもので、遠方からも参加できます。今のところ経口薬のみですが、全国的にも先駆的な取り組みで、今後のがん治療の発展に寄与できると確信しています。

―がんセンター新築の基本構想が策定されました。

丹羽総長　方針としては、病院と研究所が